

時間分散と積立投資を深く考える

大和アセットマネジメント
資産運用普及センター

(2025年2月28日作成)

分散投資とは？

4つの分散投資

- 分散投資とは言うまでもなく、さまざまな投資対象に投資することで、リターンのバラツキを平準化させ、リスクを抑制しようとする投資手法であり、主に以下の4つが考えられます
- ただ、通常は「日本株・米国債・商品を2回に分け買う」など、複合的に分散投資している場合が多いでしょう

手法	概要
資産分散	(同一地域で) 投資する資産を分散する 例えば、「国内株式と国内債券」、「米国債券と米国リート」など
地域分散	(同一資産で) 投資する地域を分散する 例えば、「日本国債と米国国債」、「先進国株式と新興国株式」など
銘柄分散	(同一地域・同一資産で) 投資する銘柄を分散する 例えば、「トヨタ株とニトリ株」、「アップル株とウォルマート株」など
時間分散	一度にすべてを売買せず、何回かに買い付け(売り付け)を分散する 例えば、「100万円投資する際に50万円ずつ2回に分けて買う」など

(出所) 大和アセット作成

時間分散への疑問

- 資産分散、地域分散、銘柄分散は、時間に関係無く、あるいは時間が経てば経つほど、分散効果が得られやすそうです
- **しかし、時間分散はどうでしょう？ 仮に1カ月の間をおいて2回に分けて買ったところで、その後1年、5年、10年と投資期間が長くなればなるほど、買い付けを1カ月開けた意味は薄まり、分散の効果がさほど無いように思われるのですが・・・**

時間分散は、一般的にどのように説明されているか？

主要金融各社ホームページの用語解説より

□ 時間分散に関して、金融各社は自社ホームページ用語解説で、以下のように説明しています

金融機関	説明文
大手証券A社	株式などを売買する際に、一度にすべてを売買せず、何回かに分散させて売買を行うこと。時間を分散させることにより、リスク軽減を図ります。
大手証券B社	株式も債券も常に値動きがあるので、一時期にまとめて投資をするのではなく、時間をずらしながら投資を続けることによって、購入価格を平均化して、大きな値下がりリスクを避けるという考え方。
大手証券C社	ひとつは投資タイミングの分散で、ある程度長い時間軸のうえで、「ドル・コスト平均法」（定時定額購入）に代表される複数回に分けての投資や、複数回に分けての売却で、買値や売値が平均化されることによって高値づかみや安値売りを避けようとするものです。 もうひとつが長期間投資することによって、1年当たりの価格変動のブレが小さくなる効果を期待するもので、長期投資によるリスク低減効果のことを時間分散効果と呼ぶことがあります。
大手銀行A社	時間分散とは、主に投資のタイミングと、長期的な目線で投資を行うといった2点のことを指します。投資のタイミングとは、いわゆる「ドル・コスト平均法」によるもので、価格変動のある商品を一定金額購入していくと、毎月同じ数量（口数）を購入する場合に比べて平均購入単価を安定させる効果が期待できることをいいます。また、長期的な目線で投資を行うことにより、世界情勢や経済情勢の影響を平準化することが期待できます。
大手銀行B社	時間の分散とは、一度にまとまったお金を投資するのではなく、毎月10,000円というように一定金額を継続的に投資し、購入時期を分散させることです。市場環境が変化する中でも、一時的な価格変動のリスクを分散させる効果が期待できます。
大手運用会社A社	投資する時期を分ける方法を「時間分散」といい、代表的な方法がドル・コスト平均法である。
大手運用会社B社	投資を行う際、一度に投資金額の全額を投入するのではなく、何回かに時期を分けて投資すること（投資タイミングの分散）をいいます。ドルコスト平均法を用いる定時定額購入や積立投資は、時間分散の代表的な投資手法です。

* 「用語集」に比較的明確に「時間分散」が揭示されているものに限っています （出所）各社ホームページより大和アセット作成

分散投資の本質に立ち返るならば、時間分散とはこうではないのか？

■ 他の分散の例にならった時間分散の例

- 分散投資の本質は、よく言われるように「1つのカゴに玉子を全部入れるな！」でしょう
- 資産分散、地域分散、銘柄分散になれば、時間分散は違う投資期間に投資することが本来の意味ではないでしょうか

	集中投資	分散投資		
資産分散の例	 株式	 株式	 債券	 リート
地域分散の例	 日本	 日本	 米国	 インド
銘柄分散の例	 トヨタ	 トヨタ	 ソニー	 第一三共
時間分散の例	 2005年	 2005年	 2010年	 2017年

* 図はイメージです (出所) 大和アセット作成

したがって、時間分散はこう説明すべきでは？

■ 一般的な時間分散の説明

- 時間分散とは、一度ではなく何度かに買うタイミングを分けて投資することです
- ですから、例えば100万円投資するのであれば、それを一度に投資するのではなく、25万円ずつ4回に分けて投資することで、高値つかみのリスクが減らせます
- さらに、毎月一定額を投資する積立投資だと、よりリスクを低減できます



■ 本来の時間分散の説明

- 時間分散とは、別々の期間に投資することです
- ですから、例えば100万円を1年間投資するのであれば、25万円ずつ4年間に分けて投資することで、投資タイミングの当たり外れのリスクが低減できます
- つまり、**時間分散とは長期投資のこと**なのです
- この観点から言えば、p2の大手証券C社の説明の後段「もうひとつが長期間投資することによって、1年当たりの価格変動のブレが小さくなる効果を期待するもので、長期投資によるリスク低減効果のことを時間分散効果と呼ぶことがあります。」は本来の時間分散の意味に基づく説明といえそうです

時間分散≠積立投資でなかったら、積立投資ってナニ？

■ 積立投資 = 制約条件下の投資

- 時間分散が分割買い付けのことでなければ、一般に時間分散と考えられている積立投資はどう捉えれば良いのでしょうか
- 積立投資とは、投資手法や投資理論と捉えるよりも、投資するにあたって予算やリスク許容度の制約条件がある場合の（最適）解と考えるべきでしょう
- 例えば、毎月1万円の積立投資をしている（始める）人は、予算上、あるいはリスク許容度上の制約によって、その金額の積立投資しか選択肢がない場合が普通でしょう
- 従って、よくある「まとまった金額の一括投資と、それよりはだいぶ少額の積立投資は、どちらが良いのでしょうか？」みたいな問いは、そもそも問いとして成立していないといえます
- なぜなら、まとまった金額がないので積立投資するわけですから
- 敢えてその問いに答えるなら、正解は「一括投資（時間以外は分散）して、積立投資もする」ではないでしょうか？（もちろんトータルでリスク許容度内であればですが）



なぜ積立投資がいいのか？（ドル・コスト平均法ってナニ？）

■ 今更聞けないドル・コスト平均法：なぜ買付単価が安くなるのか？

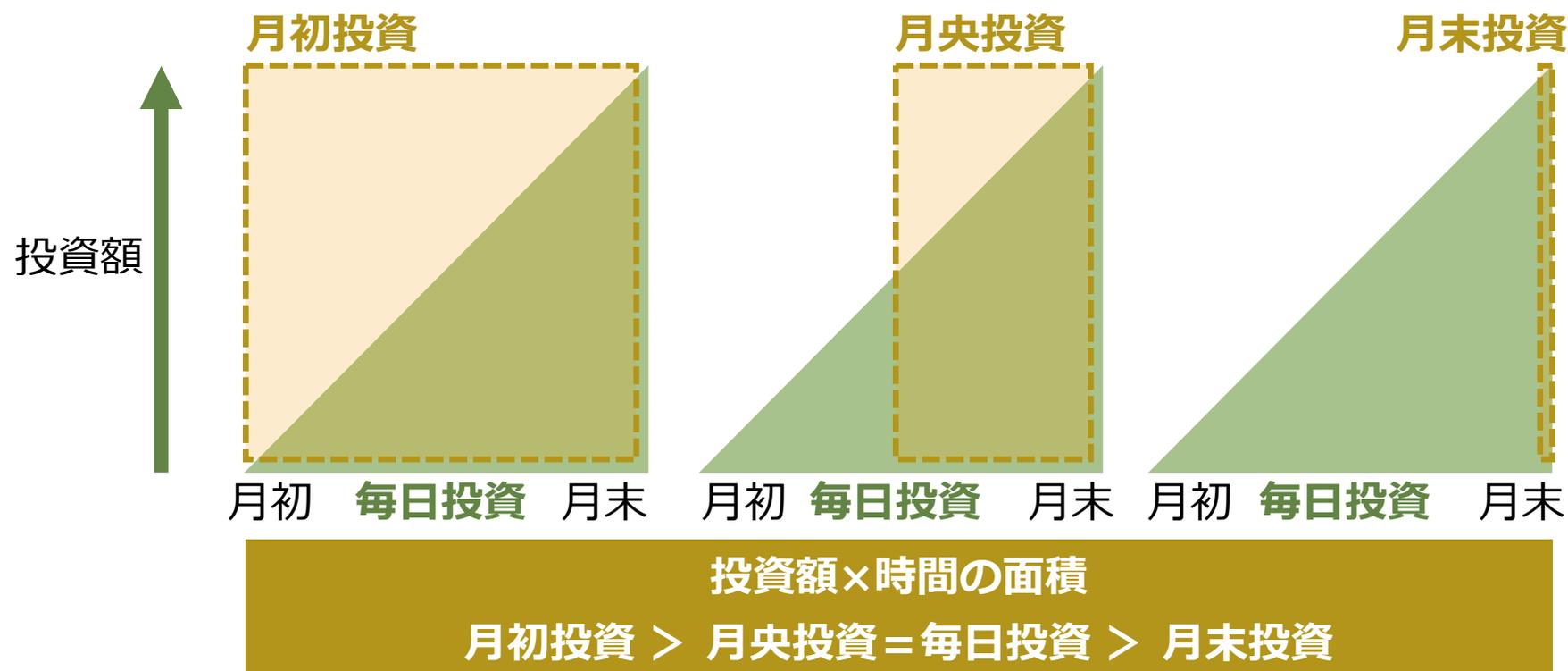
- ドル・コスト平均法（定額買付）の買付単価（数学的には【調和平均】といいます）は、定量買付の買付単価（同じく【相加平均】あるいは【算術平均】）より低くなります（と言われても分からないですよね）
- 仮に、1回の投資額が1,000円とした場合、1回目の買付単価が100円、2回目が50円だった場合、平均買付単価は66.6・・・円となり、100円と50円の単純平均の75円より安くなるのがドル・コスト平均法の効果です（と言われても、なぜそうなるのか、今ひとつ分からないですよね）
- では例を変えて・・・、車で往路を時速100km、復路を時速50kmで走った場合の平均時速は何kmでしょうか？
- 中学受験のような問題ですが、当然、あわてて75kmと答えると間違いで、ちょっと考えて往路と復路の掛かる時間が違うことに気がつけば、正解が66.6・・・kmであること（少なくとも75kmより遅いこと）は、分かるのではないのでしょうか
- そう、この2つは同じことなのです

上記投資の買付単価		上記車の平均時速		一般形	
$\frac{1,000円 \times 2}{\frac{1,000円}{@100円} + \frac{1,000円}{@50円}}$	=	$\frac{\text{片道距離} \times 2}{\frac{\text{片道距離}}{100\text{km/h}} + \frac{\text{片道距離}}{50\text{km/h}}}$	=	$\frac{2}{\frac{1}{100} + \frac{1}{50}}$	= 66.6・・・

積立投資の毎月 or 毎日問題（悩む必要はありません）

■ 毎月積立と毎日積立：どっちが有利か、実は考えれば分かります

- 投資系ネット情報で意外と多いのが「毎月積立と毎日積立はどちらが有利か？」の検証モノで、「毎月 毎日 積立投資」で検索すると数十万件ヒットします
- 上位表示されているものは、どちらかといえば毎日有利派が多いように見えますが、検証の仕方が適切でないものも多く、信頼できる情報は多くないようです
- **1990年から2023年末までの期間をS&P500で検証した結果は、有利な順に、月初投資→月央投資＝毎日投資→月末投資でした**
- なぜそうなるかという、この間S&P500は大枠では上昇相場なので、少しでも早く買った方が有利になるわけです
- つまり、上昇相場であれば、投資額×時間の面積が大きい方が有利になるという、考えてみれば当たり前の結果です



大和アセットマネジメント

Daiwa Asset Management

当資料のお取扱いにおけるご注意

- 当資料は投資判断の参考となる情報提供を目的として大和アセットマネジメント株式会社が作成したものであり、勧誘を目的としたものではありません。
- 当資料は信頼できると考えられる情報源から作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。運用実績などの記載内容は過去の実績であり、将来の成果を示唆・保証するものではありません。記載内容は資料作成時点のものであり、予告なく変更されることがあります。また、記載する指数・統計資料等の知的所有権、その他一切の権利はその発行者および許諾者に帰属します。
- 当資料の中で個別企業名が記載されている場合、それらはいくまでも参考のために掲載したものであり、各企業の推奨を目的とするものではありません。また、ファンドに今後組み入れることを、示唆・保証するものではありません。